

今年も終わりですね

今年も12月がやってきました。1年のたつのは早いものですね。

大晦日のことを「おおつごもり」ともいいます。皆さんは、なぜ、そのようにいうか知っていますか。

「つごもり」（晦日）というのは、ツキゴモリ（月隠）という言葉が変化して生まれた言葉といわれています。その意味は、月の光が隠れてしまって見えなくなることなのです。昔の歴（陰暦）では、月が月末の頃見えなくなってしまうようになっていましたから、月末や月の最後の日をつごもりと呼んだのです。ですから、1年の1番最後の日ということで、おおつごもりといていたのです。

さて、大晦日には大半の人が「年越しそば」を食べると思います。どうして、この日におそばを食べるようになったのでしょうか。それには、こんなおもしろいいわれがあるのです。

江戸時代、金や銀を細工する人たちが大晦日の日に、床に散らばった金や銀の粉をそば粉を練ったもので集めて掃除をしたというのです。そのことから、大晦日におそばを食べると、翌年はお金に困らなくなるというのです。

また、この日は朝まで起きていなければならなかったからだという言い伝えもあります。それは、年を越すためにやってくる神様を迎えるためだというのです。もし、寝てしまったら突然、白髪頭になってしまうともいわれています。だから、お腹がすくので、おそばを食べるのだともいうのです。

おそばのように、細長く生きることを願って食べるのだといういわれもあります。

皆さんのまわりにも、いろいろな言い伝えや風習が残っていると思います。昔の人たちが、どのようなことを考えてそのようなことを始めたかを調べてみることも大切なことです。

自分たちの生活する地域に伝わる伝統を大切にしながら、世界各地の様々な風習について考えるのに、お正月は良いチャンスかもしれません。

新しい年を迎える準備は、もうできましたか？今年よりも、もっともっと良い年になるようにしたいと思いますね。

初心に戻る

古い話で恐縮です。私が小学校四年生の時、担任の先生が産休に入り、産休代替の先生が受け持って下さった時の話です。

その先生は、私たちがそれまでに見たこともないほどの美人。しかも若い。当然(?)、私たちの張り切りようは、それはもう大変なものでした。休み時間は先生と鬼ごっこをしたり、いろんな話を聞いたり、毎日の学校生活がまるで天国にいたようでした。

その先生は授業に詰まるのでしょうか、よく顔を赤らめて黙り込んだりしましたが、そのたびにクラスの大部分の子どもが、「助けてあげなくては・・・」と思っていたようです。もちろん、私もその一人でしたが、……。そして、先生に「よくできたね」と声をかけてもらいたい一心で、それまでとは打って変わって、一生懸命勉強したのです。在任わずか三ヶ月、飛ぶかごとくという表現を実感した日々でした。やがて、訪れた別れの日、その日のことは今でも甘酸っぱい思いと共に鮮明に思い出します。先生は黒板の前で長い間うつむいていました。あっと顔をあげたと思ったら、涙が先生の頬を伝わってこぼれ落ちました。「さようなら・・・」たった一言の挨拶でしたが、まさに万感の思いを感じる挨拶でした。

中学生になっても同じような思い出があります。考えてみると不思議ですよ。子ども達は どうしてこんな「素人先生」に心を開き、魅力を感じるのでしょうか。どうして、熱心で責任を持って指導しているベテラン先生を時には疎ましくさえ感じてしまうのでしょうか。

私はその理由を最初は「若さ」かと思いました。でも、若くても子どもが心を開かず、魅力を感じない教師もいます。「美人」でも同様です。つまり、「若さ」も「美しさ」も一つの魅力かもしれませんが、それはあくまでも付随的なもののような気がするのです。

もちろん、「子どもが好き」という先生の愛情と心がストレートに伝わることは大切なポイントでしょう。しかし、それ以上に重要な鍵は、教師の「初心」が感じられるかどうかにあるような気がします。「教えてあげる」のではなく、「共に学ぶ」という共感の関係が、たとえ意識していなくてもあるか否かではないかと思うのです。

中学校駅伝競走関東大会 女子陸上部

12月7日(日) 10時 スタート

海の公園・八景島 応援をお願いします。